

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	13
瑪瑙集	26
紅玉集	28
俳誌交歓	29
6月号月評	30
惠贈句集拝見 (33)	32
惠贈俳誌拝見 (7)	34
特別作品「極夜行」	36
琥珀集作品鑑賞	38
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	39
Ⅱ	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
ひこばえ通信 (10)	43
他誌転載	44
妣の国父の蒼天 (27)	46
司馬遼太郎記念館・鶴橋吟行	48
エッセイ「生きて行く」	50
エッセイ「おあてがい」	51

今月の一句

竹伐の鬨や雲中にて走る

桂樟蹊子

(昭和三十六年作)

鞍馬寺の竹伐会式の句である。句の前半は丹波座と近江座の法師が山刀で青竹を手早く切り山刀をかざして勝どきをあげて坊へ駆け込むさまを詠まれた。後半はそれらの行事すべてが梅雨雲のなかでおこなわれた様子を「雲中にて走る」の語に表現、法師たちの力強く緊迫した様子が眼前に迫る句である。

隆子

春の答志島

塩路隆子

水軍の島春潮の荒るるまま

半生を和布干す意地島をんな

浜をゆく和布すだれをくぐりたく

和布影頼みて猫の深ねむり

和^め布^か刈^り男^おは万葉歌碑に一礼し

水軍の胴塚護る藪つばき

首塚を攻めあぐねる卯波かな

五月号光耀抄

塩路 隆子選

狼の声籠りたり山桜
花筵産土の座を設へて
霞むあの辺り里坊湖を航く
洗濯機の独りを回す春の水
昭和の日伏見に残る和菓子舗
兄の帽被り入園次男坊
川光る哲学の道花三分
深閑の愛染坂や春夕焼
春燈や窓の数だけ窓の色
茶柱やさくら餅には桜の香
少将の百夜通ひのはねず梅
花の下園児懸命義援箱
のどかなり猫と語らふけふのこと
抱き上げし嬰兒の笑顔初ざくら
ひと言に心ゆるべりあたたかき
草餅や駅舎の裏に渡船の碑
韃鞮帽に泣く子笑ふ子修二会果つ

坂上 香菜
松岡 和子
前川 ユキ子
杉本 綾
増田 一代
鈴木 照子
中川 すみ子
長濱 順子
中本 吉信
新実 貞子
西垣 順子
西田 史郎
能勢 栄子
笹井 康夫
清水 侑久子
片岡 久美子
小林 成子

春宵や武家屋敷の灯早点り
 尊徳の肩に寄り添ふ初桜
 たんぽぽの大志大樹とならび咲く
 人形の歩きたげなり春帽子
 入院に飽きて日永の毛玉とり
 瓦斯灯にゴンドラ舳ふおぼろの夜
 合言葉で開かぬ抽斗春愁
 春昼や行くあてのなき旅プラン
 板切れにメモとる大工囀れり
 花傘の舞ひたるさまやしだれ梅
 駆け降りる高廈階段春の地震
 攫はれし霊戻り来よ春雪に
 救はれし命の重み座禅草
 三陸の春の景色を胸内に
 その時は貴方は逃げて花の雲
 Gカウンター―無人の町に鳥交る
 大地震の対策澱む鳥曇
 国難を越えよのエール辛夷咲く
 地図上に原発分布春寒く
 いかなごの釘煮届けり三・一一

池田加寿子
 石川かおり
 伊東 和子
 岡 佳代子
 山口キミコ
 宮田 香
 森下 康子
 竹内 悦子
 田下 宮子
 田村 幸子
 栗倉 昌子
 谷口 俊郎
 小林 久子
 寺田 光香
 和田森早苗
 山崎 真義
 北尾 章郎
 三川美代子
 伊庭 玲子
 西村 敏子

舟唄に合はす手拍子花見舟
 雛の寺庵主静かな公家ことば
 シュレットダーに憂きこと捌く花の夕
 太極拳春の日差しを掬ひけり
 チューリップおとぎの国のバリエーション
 遺されしパーカーのペン春の昼
 糸ざくらを散華となして磨崖仏
 花咲爺になりたき気分花一分
 電球の中は真空春の闇
 白絹を延べし如くに梅の里
 嵐峡の仄かな明り遠桜
 清明やみすゞの詩の透明度
 チューリップメゾプラノの歌唱ひ
 春休み地獄めぐりと茹で卵
 囀りや笠を目深に大師像
 あさりみな口開け独り身も宜し
 目借時朝刊未だ手離さず
 朝月の残る花より鳥の声
 化け猫が宙を舞ふなり春歌舞伎
 春鹿を撫でつつめぐる神の島

伊藤 純子
 宮崎左智子
 藤見佳楠子
 中村ふく子
 秦 和子
 田中 芳夫
 笠井 清佑
 川崎 利子
 吉田 希望
 難波 篤直
 高谷 栄一
 竹内喜代子
 田中 浅子
 辻 香秀
 辻 知代子
 常田 創
 阪本 哲弘
 塩路 五郎
 飯田美千子
 井口 淳子

その勢は炎のごとき物芽かな
 曾祖父の愛用の出刃初鯉
 木霊とも風の声とも辛夷咲く
 パソコンに積もる埃や花曇
 明日生くるための点滴春いく夜
 芽吹く木に白鷺憩ふ城址かな
 鶯の初鳴き朝の風に乗り
 菜の花を分けて行くなりねこ電車
 きつと今仙人在はす紫木蓮
 牛蛙池番人の強おもて
 花咲くと手毬抱へし児の告げる
 奔放に咲くも白木蓮哀しかり
 花咲くも大地震もまた神の意思
 穏やかなお市の里や花日和
 壁炉焚く高原ホテル神戸の灯
 雪割草の強さを母に貰ひたし
 原発の事故収まらず春の雷
 春よ来い東日本の地震跡
 百千鳥鳴かず羽搏てる津波跡

五十嵐 勉
 伊藤 憲子
 稲田 和子
 宇治 重郎
 大松 一枝
 落合 晃
 桂 敦子
 木戸 宏子
 小西 和子
 和田 郁子
 山本 節子
 山本 孝夫
 横田 矩子
 松田 和子
 松田 とよ子
 松田 洋子
 三原 利枝
 西岡 裕子
 田中 久子

琥珀集

花筵

松岡 和子

白木蓮忘れていたる空の青

日曜の寝坊嗤はれ初蛙

春耕や季節のふたつの先をよみ

峪ひとつ移れる落暉日永かな

花筵産土の座を設へて

語るほどの過去もなかりき臙の夜

うらら日やちびた鉛筆削る夫

春愁

坂上 香菜

遡る鯉の浅瀬や花筏

朝暾や微動だにせぬ花万朶

車椅子へ挨拶の蝶ひかりつつ

狼の声籠りたり山桜（東吉野）

はつとして駅をたしかめ目借時

春愁や夜の時計が十二打ち

喜びの声掛け合うて燕来る

霞む里坊

前川ユキ子

霞むあの辺り里坊湖を航く

古書店の偏屈あるじ啄木忌

羽衣を干したるさまに春の雲

向学心なほある白寿さくら咲き

蝶寄れり解体了へしホテル跡

近江野に農夫の昼餉のどかなり

庭師その鋏のリズム春うらら

春の水

杉本 綾

洗濯機の独りを回す春の水
ねんごろになほねんごろに花菜和
鹿出没されど春耕ひたすらに
侘助や鳥横むきに逆さまに
しあはせと思へる幸や桜咲き
旬魚買ひ春感じつつ夕支度
一億の強き絆や春の地震

桜餅

増田 一代

ねんごろに雛納めぬる姉妹かな
昭和の日伏見に残る和菓子舗
外出の夫に頼みて桜餅
ゴミの日に出されし春の炬燵かな
うぐひすの声を真似つつ坂登る
龍天に日本人です元氣です
この世紀哀しみ多し梅の頃

次男坊

鈴木 照子

兄の帽被り入園次男坊
土筆摘むけふが最後の園の庭
山葵田の水の声聞く道祖神
取れとれの山葵を添へて長寿蕎麦
雪解川轟く穂高星の宿
山脈型の屋根に春禽ちひろ館
囀りや山のポストへ木のはがき

桜餅

中川すみ子

春の雪光となりし湖面かな
川光る哲学の道花三分
最短のメールを受送春の地震
蚕豆の花咲く小径七曲り
強東風のビル天辺にへりポート
菜の花に払ひたる鬱地震の後
朝一の宅急便や桜餅

春の午後

長濱 順子

義太夫の墓碑の字薄れ白木蓮

塀越しの緋寒桜や寺の町

深閑の愛染坂や春夕焼

春北風に鳴れる風鐸多宝塔

子を連れて三Dアニメ春の午後

春寒し電池米水買ひ走り

被災地の卒園式や余震なほ

茶 柱

新実 貞子

茶柱やさくら餅には桜の香

メールにて少女約束春休

満面の笑みの報告合格子

MRIの脳に不安や春寒き

大津波に翻弄更に忘れ雪

壊滅の町を鎮めの雪霏霏と

地震鎮り炎点々冴返る

春 燈

中本 吉信

春燈や窓の数だけ窓の色

梅林に陣取る画架のひと所

ハーネス引く帰心の仔犬梅の園

諭されて仔猫戻しに行くをさな

叫喚を呑みて滾りし春津波

被災者に届く物心草萌ゆる

何時しかに野摘み土筆のパック売り

はねず梅

西垣 順子

少將の百夜通ひのはねず梅

はねず色に染る踊りや弥生尽

被災者に届く合格春の報

未曾有の災害更に寒戻り

舞妓らの募金呼びかけ春踊り

避難所の隅ささやかに卒業式

伝言板に群がる人や春の雪

灌仏会

西田 史郎

揚雲雀

笹井 康夫

ぬかづきて被災者悼む灌仏会

花の下園児懸命義援箱

大津波瓦礫の大地花咲けど

絵馬堂の神馬駆けをり外は春

椿落つ真紅の色を重ねあひ

慎ましき花見の後のパンダ園

席譲る背広姿の新社員

地震

能勢 栄子

野のすみれ

清水侑久子

目を覆ふがれきの中に梅の花

慰めの言葉失せたり春の地震

早春や波の攫へる大き夢

のどかなり猫と語らふけふのこと

春キャベツ変身したる焼きようざ

黄水仙年々群を大きくし

春まきの種子を揃へて畑に立つ

抱き上げし嬰兒の笑顔初ざくら

湖岸行く銀輪少女風光る

空青き柵田を守る桜かな

制空権主張するかに揚雲雀

里の道春はいいねと妻ほつり

かにかくに土の香恋し土筆つむ

支へ合ふ今が極楽花の下

人知れず咲きては消ゆる野のすみれ

ひと言に心ゆるべりあたたかき

早春の空へ餅や道普請

春雪を払ひ香焚く墓参かな

光悦寺茶の花垣をめぐらせて

はやばやと草餅つくり友来たる

被災地に春雪無情降りつもる

猫柳

片岡久美子

さくら貝

池田加寿子

草餅や駄舎の裏に渡船の碑

対岸の近代ビルや春の雲

淀川の悠然として利休の忌

さらきらと一角占めし土佐水木

せせらぎの光ぎん色猫柳

白樺の翳る峠や露の臺

友からの受話器の声の春めきて

花冷

小林 成子

若 緑

石川かおり

大寺にひびく鐘の音夕桜

韃鞮帽に泣く子笑ふ子修二会果つ

花冷の鏡にこぼす愚痴あまた

入学の子の背はみ出すランドセル

逝く春や若き尼僧の大茶盛

鐘楼へ颯々見せて八重桜

夕の鐘ひびく丘陵八重桜

思ひ出は潮騒の音さくら貝

春寒し骨董店に身を置きて

駆け抜けるきさらぎ天と地の怒り

梅の香や欄間に彫れる高瀬舟

武家屋敷過去を背負ひし古雛

静けさにしだれ桜の気品満つ

春宵や武家屋敷の灯早点り

尊徳の肩に寄り添ふ初桜

囁や手作り市の店開き

黙々と草餅作る手の厚み

春眠に枕代はりの哲学書

大津波に負けず堂々若緑

朝掘りの春筍の土匂ひ

風吹けば鈴の音色や花海棠

チューリップ

伊東 和子

今日やる気春一番が押し戻す
花冷えに不安半分齒科の椅子
チューリップ撓むや不眠続きける
チューリップのピンクで飾る子供部屋
たんぼぼの大志大樹とならび咲く
春陰や小窓に買へる宝くじ
庵ひそと真葛原に花を待つ（西行庵）

紅枝垂

岡 佳代子

白寿とて乙女の笑顔紅枝垂
人形の歩きたげなり春帽子
竹林のその奥知らず嵯峨の春
春の海汀に波紋残しけり
薫る風大きく吸うて邪念吐く
山桜土の匂ひの豊かなり
映出づる水の匂へりおぼろ月

白木蓮

山口キミコ

大津波のもたらず瓦礫芽吹き季
被災地に更なる打撃なごり雪
退院の眼にもまぶしや白木蓮
入院に飽きて日永の毛玉とり
麻酔効く二つ三つ四つ臙なり
春の闇計画停電ある日夜
列島の景攫ひけり春津波

おぼろの夜

宮田 香

瓦斯灯にゴンドラ舳ふおぼろの夜
大地震の祖国へ祈る春夜弥撒
野遊や行き先誘ふ牛の声
佐保姫と同行の旅トスカーナ
春昼や眠気ざましの流行歌^{はやり}
海棠やアッピア街道巡礼者
「ベン・ハー」の車輪の空音春の雷

啄木忌

森下 康子

花曇り目まひ虚実に余震なほ

囀や立ち直れないその言葉

彼岸会や黄泉へも津波行きましたか

花便り宅の犬の名「さくら」です

四月馬鹿犬の瞑想見てしまふ

牛乳を一気呑みして啄木忌

合言葉で開かぬ抽斗春愁

彼岸西風

竹内 悦子

被災者へ先づは黙禱彼岸西風（東日本大震災）

春休みオセロゲームを兎と競ふ

春昼や行くあてのなき旅プラン

菜の花や人に優しき作家司馬

大地震の復興遠し三月尽

沈丁に声かける人出勤時

天孫の社の開花待ち焦がれ（大津天孫神社）

志野碗

田下 宮子

うららかや淡き刺繍のベビー服

一人碁の結着つかぬ夜半の春

ひと筆を添へて釘煮の届きけり

志野碗にくぎ煮たつぷり酒を酌む

避難所を知らず回覧春疾風

板切れにメモとる大工囀れり

梨咲きて交配ひと日甲斐の人

花 傘

田村 幸子

韃靼の行目のあたり修二会かな

喚声と火の粉浴びつつお松明

春惨事陸奥の波濤の大暴れ

無惨なるテレビの画面春浅き

花傘の舞ひたるさまやしだれ梅

吉報を待つ受験生落ちつかず

みちのくの復旧願ふ花だより

瑠璃集

成田にて

駈け降りる高廈階段春の地震
大地震に決めたる覚悟梅白し
枕辺の地震速報凍返る
おぼろ夜に非常口灯青白き
万愚節と思ひたき日の暮れにけり

東国の大震災

聖めよかし瓦礫の街に牡丹雪
混沌の彼の地鎮もれ涅槃雪
攫はれし霊戻り来よ春雪に
辛夷咲く「北国の春」歌へまた
国騒ぐ地震現なり京の春

粟倉 昌子

谷口 俊郎

春吹雪

大津波の爪あと深し春の凍
救はれし命の重み座禪草
思ひ出も藻くづとなりぬ春の陸奥
篝火を揺らせば桜活気づき
散り際の更に華やぎ花吹雪

小林 久子

春息吹

首伸ばし春風浴びる湖の亀
三陸の春の景色を胸内に
新学期の笑顔満開京の町
東北へ想ひ届けよ春息吹
六十年を重ねし出逢ひ桜咲く

寺田 光香

その時は

呱呱の声あげしは男の子春未明
携帯電話の声くぐもれり春の風邪
田の消えてマンション春の視野狭く
陸奥をいたみ遅めの花便り
その時は貴方は逃げて花の雲

和田森早苗

六月号月評

塩路 隆子

三・一一の被災から一カ月を経過した。何処まで広がるか分らない放射能汚染に、米作のゆたかな東北地方の大地を思うとき、悲しみが深くなるばかりである。

今月も瑠璃集を中心に月評を続けたい。

駆け降りる高廈階段春の地震

粟倉 昌子

大地震に決めたる覚悟梅白し

南フランスへの旅のために成田に前泊されたホテルの翌日、出発の日に逢われた大地震であった。その一連の句に詠われている「決めたる覚悟」にその様子を窺うことが出来る。真白な梅が効いた「物仕立ての句である。ご無事で何よりでした。」

攫はれし霊戻り来よ春雪に

谷口 俊郎

亡くなった人が二万七千人にも及ぶ人達の霊に呼びかけている中七に惹かれる。寒空に舞い降りる淡い春の雪のひとつひら、ひとつひらに載って、還っていらっしやいよと呼びかける作者の敬虔な気持の伝わる句である。作者のこれからを期待する。

救はれし命の重み座禅草

小林 久子

この度の地震で危機一髪、救われた人も多い筈である。生きることの大切さ、有難さを感じておられることである。つくづく感じる中七の「命の重み」の措辞がこの句を支えている。「座禅草」がしっかりと句を引き締めている。

三陸の春の景色を胸内に

寺田 光香

陸前・陸中・陸奥を総称して三陸と呼ぶ。作者は以前にこの地方を旅行されたのであろう。壊滅に等しいこの度の地震に於て旅をされた美しい景色を思い出し、二度と見られない当時の春の景色をしっかりと胸に刻もうと思いつき起こされている。最後の「胸内に」と言う不安定なとめ方にも注目した。

その時は貴方は逃げて花の雲

和田森早苗

「その時」とはどの時なのか、そんな野暮なことは言わない。大津波を想定されての一句であろう。体のお弱い作者の精一杯の愛情の叫びとお見かけした。ご主人はそれにどう応えられたのだろうか、お聞きしたいものである。「花の雲」の季語が、哀しく印象的である。

(以下略)